

直筆と確信した。

若き日、日本に留学

これがなぜ貴重かといえば、弘一法師の直筆の書簡が日本で初めて内山の遺品から見つかったからだ。弘一法師は没後70年近く過ぎた今もおお、中国や台湾、東南アジアなどで人々の崇敬を集めている。一方の内山は魯迅に最も近い日本人として知られ、日中双方の文化人と親交を結んだ。

書簡は弘一法師の依頼を受け、内山が華嚴経疏論纂要」という経典を日本の大学や寺院などに郵送したことに對する礼状だった。内山の随筆や弘一法師の日記から経典が日本に送られたことは知

ていたが、書簡の発見でそれが裏付けられた。弘一法師は若き日、日本に留学して西洋美術や音楽、演劇を学んだ。また日本女性を妻とし、日本とのゆかりも深かった。中国などでは信奉者も多いのに、日本では無名に近い。私はこれまで弘一法師の教え子で中国

漫画の祖、豊子愷について研究してきたが、彼にとつて弘一法師は切り離せない存在。併せて弘一法師のことを調べ始め、今日に至っている。後の弘一法師、李叔同は天津の裕福な塩商の家庭に生まれた。父は科擧に合格した進士で、官吏を辞した後は家業に励

西洋文化にも親しんだ。母の葬儀では自らピアノを弾いて哀悼し、弔問客には洋食と中華料理をふるまった。この新式の葬儀は同地の新聞でも報道されたという。芸術面でも多彩な才能。私費留学生として東京美術学校（現在の東京芸大）西洋画科撰科に入学したのは1906年のことだった。当時、西洋美術を専攻する中国人留学生は珍しく、徳富蘇峰創刊の「国民新聞」が取材

単独で刊行、また日本の新劇に触発され、留学生仲間と中国新劇の先駆けとなった春柳社を旗揚げし、東京で「椿姫」「アングル・トムの小屋」などを上演し好評を博した。10代から京劇を好み、舞台経験もあった李叔同は自前で高価な衣装をおつらえ、日本にいた魯迅も観劇に来た。

中国仏教界の混乱期にあつても、戒律を守り、修行に専心した姿勢が今も信奉者の絶えない理由のひとつかもしれない。内山完造を通して日本の大学や寺院に寄贈した「華嚴経疏論纂要」は、福建省福州の名刹で弘一法師が発見した古い経典木版を自ら整理し、書物として全120巻にまとめた大著だった。ほかに内山を通じて日本に多くの仏典を寄贈している。弘一法師自身は戦禍で焼失の恐れがある中国よりも日本に送った方が安全と内山に語っているが、優れた仏典を寄贈して仏法を広め、無益な殺りくが終わることを願ったのかもしれない。

深まる謎、解明へ
私が弘一法師の弟子、豊子愷のことを知ったのは全くの偶然だった。今から十数年前、私は天津の大学に留学していた。北京を訪れた際、書店で立ち読みをしていると店主が「これを買いたくない」と熱心に勧めてくれたのが豊子愷の本だった。天津に戻り、中国人の友人にこの本を見せると、師匠の弘一法師は天津出身だと教えてくれた。

中国の高僧、日本と深い縁

◇経典など寄贈した弘一法師、直筆書簡が都内で発見◇

大野 公賀



晩年の弘一法師（写真上）と今年見つけた直筆の書簡

み、晩年には金融業も営んだ。母は父の第3側室だった。李叔同は10代から天津の文化人と交わり、篆刻などの伝統文化を学ぶ傍ら、



「清国人留学生、洋画を志す」と題した記事を掲載している。留学中、中国初の音楽専門誌「音楽小雑誌」を第11代祖師となった。

留学前すでに彼には中国に妻子がいたが、絵画モデルと思われる日本女性を妻として共に帰国。出家によって離別を余儀なくされた彼女のその後、足取りも不明である。出家後の弘一法師は修行で各地を行脚、厳しい戒律で知られる南山律宗

私の研究もまだ緒に就いたばかり。調べれば調べるほど謎が深まるが、それを一つ一つ解き明かしていきたい。（おのおの・きみかII東京大学東洋文化研究所特任准教授）

